

審査の結果の要旨

氏名 古橋紀宏

本論文は、主に魏晉時代の礼学上の議論や注釈、及び礼制の変遷について考察し、それを通して後漢末及び魏晉時代の諸学説の特質と、それらを生み出した時代背景を解明しようとしたものである。

第一章においては、魏晉経学史上の一大懸案——後漢末の鄭玄の説が魏においてどのように影響力をもつようになったかを問題とし、堯舜禪譲に関する経書解釈をとりあげて考察し、従来のべられることのなかった、魏の明帝期に鄭玄説の影響力が急に強まっていく事実を指摘する。第二章においては、魏の明帝期における礼制改革と、魏の王肅の礼学説の関係を考察し、礼制改革における具体的な議論が、王肅の学説の形成に大きく関わっていたことを明らかにする。またその鄭玄説にもとづく明帝期の礼制改革に対して、王肅は従来の制度や通念を守る立場からそれに反対したとのべ、王肅説のもつ現実重視の性格を指摘する。第三章においては、王肅以外の魏晉時代の新解釈について考察し、それらの解釈は、経書が社会的な規範としての性格を強めるにともなって、理念的な鄭玄説のもつ施行上の難点を修正しようとしたものであると論じる。

著者は以上の分析考察を通して、(1) 魏晉南北朝時代は、鄭玄の体系的な礼説が王肅説などの現実的な立場からの反論を一時的に惹起したものの、全体としては鄭玄の解釈が次第に受け入れられる傾向にあり、(2) そこには普遍的な礼説を指向する当時の時代背景があった、と結論する。

本論文において評価すべきは、文献考証にすぐれているところである。分析の対象を魏晉の礼学と定め、それを特徴づける王肅による鄭玄批判について現存する関連資料を徹底的に収集し、難解な資料を丹念に読み解き、漢唐経学史を念頭におきながら着実な手法をもって個々の資料を克明に分析し、経学史上の懸案を思想史的に解明することを試み、所期の目的を達成している。特に鄭玄説と王肅説の関係については、後の研究者は本論文を研究の基礎としなければならないであろう。

本論文には魏晉玄学との関係など、今後に残された課題もあるが、清朝考証学以来の精緻な経学研究の伝統をよく継承し発展させており、高レベルの考証研究と評価することができる。著者には魏晉経学史の全面的な解明を期待したい。

審査委員会は以上にもとづいて、本論文が博士(文学)の学位に値すると判断する。